

新潟教育会報

第70号

公益財団法人新潟教育会
(新潟教育会館内)

代表 伊藤 充

〒950-8104

新潟市中央区西大畑町590番地3

TEL/FAX 025-222-2971

E-mail <http://kyouikukai.jp>事務局 jimu@kyouikukai.jp研究所 kenkyujo@kyouikukai.jp

休館日 月曜日

印刷所 文久堂



公益

益

公益財団法人新潟教育会

代表理事 伊藤

充

平成二十四年六月一日、新潟教育会は公益財団法人として認定された。公益財団法人とは何か？それを理解するためには、現在認定されている団体を見ればよい。主なものをあげる。

・日本ユニセフ協会 ・日本棋院 ・日本消費者協会
・日本オリンピック協会(JOC)

次のような共通点がある。(「日本」も共通点ではあるが)

人様のお役に立つ仕事をしている

その分野では権威があると人様が認めている

人様から信頼・信用されている

これが、公益法人である。

「公益」という言葉を聴くと、私は村上小学校の教育目標にもなっている後藤新平の自治三訣「人のお世話にならぬよう人のお世話をするよう そしてむくいを求めぬよう」を思い出す。後藤は常に「公益」を大切にする人だった。後藤が初代総裁となった「ボイススカウト日本連盟」や、後藤が市長だった東京市の都市問題を扱う「後藤・安田記念東京都市研究所」もまた、新潟教育会と共に公益財団法人として認定された。

思えば、創立以来四〇年の新潟教育会の歴史は、県教育の振興を目指して会の運営をリードしてこられた方々、資金面から支えていただいた後援会と浄財を届け続けてくださった方々、汗をかくのを厭わず実務を担ってくださった方々など、新潟教育会にかかわったすべての方々の熱い志の積み重ねであったと思う。

心から感謝申し上げたい。そして、公益財団法人となったことを共に喜びたい。その上で「公益財団法人新潟教育会」として、皆さんと共に新しいステージに一步を踏み出したいと思うのである。

人様のお役に立とうではないか。

平成24年度 夏季大学講座

演題「映画化への道程」
～ふるさと映画にかける想い～
渡辺千雅様



講師プロフィール

熊本県天草生まれ。新潟大学教育学部卒業後、県内中学校美術教師を経て結婚退職。

現在は、WEBデザイナー、月刊地域情報紙「マイスキップ」代表、長岡まつり実行委員会副委員長、長岡フィルムコミッション「長岡ロケなび」会長、「長岡映画」制作委員会代表として連日奮闘中。

大林宣彦監督に、長岡火花を題材にした映画制作を強い情熱で働き掛け、映画「この空の花」の製作、公開を実現させた。

夏季大学講座 八月四日 長岡リリックホール



「映画化への道程」

「ふるさと映画」この空の花―長岡花火物語―にかける想い

「長岡映画」製作委員会代表

渡辺 千雅 様

一 長岡との縁

熊本県天草出身で、昭和四十六年新潟大学教育学部に入學し、初めて長岡に参りました。昭和六十年に結婚して県外に転出するまで教職に就きました。昭和六十三年から再び長岡でお世話になっていきます。その頃から「旅の人」意識を返上し、市民活動に積極的に参加してきました。月刊情報紙「マイスキップ」を創刊する機会を得て、多くの人々との繋がりができ、大きな財産となっています。

二 「長岡映画」をつくるきっかけ

マイスキップの取材で、長岡空襲の語り部である七里アイさんや花火師の嘉瀬誠次さんとの出会いは映画づくりの大きなきっかけです。また、長岡まつりの副実行委員長への就任、冊子「長岡大花火・祈り」や中越地震をテーマにした絵本「山古志村のマリと三匹の子犬」の発行や震災復興祈願花火フェニックスの打上げにも関わりました。

映画「マリと子犬の物語」のロケ支援をきっかけに、平成二十年に官民一体の組織「通称・長岡ロケナビ」が発足しました。映画やテレビ、CMなどのロケ誘致を積極的に行い、地域振興や長岡の文化向上に努めてきました。

こうした一連の流れの中で、「長岡大

花火は観光花火ではなく、多くの物語がある。長岡花火をテーマにしたふるさと映画を作りたい。そんな想いを声に出してみました。すると、共感者の波紋が少しずつ広がっていきました。

三 長岡花火の歴史

天保十二年に長岡花火が発祥しました。明治十二年に本格的な花火大会の開催、遊廓関係者の打上げ、戦争による打ち上げ中止を経て、昭和二十二年「長岡市戦災復興祭」の名のもとで復活しました。

昭和二十三年から八月一日を戦災殉難者の霊を慰めることに重きをおき、花火は、二日・三日に打上げ、今日に至ります。

平成十六年の中越地震を契機に、震災復興祈願花火「フェニックス」を誕生させました。「こんな時だからこそ、立ち

あがる勇気をもとう。手を差し伸べてくださった人々たちへの感謝をあらわそう。犠牲となられた方への慰霊のために！」

花火を打上げようとする、長岡市民の熱いエネルギー。これこそが、戊辰戦争でも長岡空襲でも、綿々と受け継がれてきた「長岡魂」だと感動しました。

四 長岡花火で世界平和を

「長岡花火物語」を映画にするならば「今だ！」と思ったのは、「真珠湾で慰霊の花火を打ち上げよう」とする長岡市

の取組、夢に感動したからです。さらに、その打上げを、シベリアで慰霊の花火を打上げた嘉瀬さんが行うという話にも、平和への強いメッセージ性を感じました。

日米開戦の総指揮官・山本五十六さんの出身地・長岡市が、双方、過去の恩讐を乗り越えて、真珠湾で「慰霊の花火」を打上げるといふ、この大きな「世界平和へのメッセージ」を「長岡映画」で発信できるのではないかと思います。

五 大林監督との出会い

大林監督が長岡花火に感動し、涙を流し、「こんな花火なら撮ってみたい」とつぶやかれたことを知りました。これは渡りに船、駄目もとでぶつかることにしました。大林監督の旭日小綬章受賞の祝賀会に出席し、「監督、長岡花火の映画を作ってください。」直訴しました。後日、あらためて事務所を訪問し、長岡市民の想い（物語）をお伝えしました。

何回かの会合を経て、「長岡が花火で平和をつくろうとしているならば、私は映画で平和をつくろう」と制作を承諾していただきました。

六 東日本大震災発生

日本中が自粛ムードに覆われ、「長岡まつりだ。」「映画だ。」と言葉に出せない状況でした。しかし、ひと月後、長岡市民は「こんな時だからこそ、心をひとつにして立ち上ろう。」と長岡魂を見せしてくれました。長岡まつり開催と花火打上げが決定し、監督も「この年に映画をつくる意味がある。」と改めて撮影台本を完成させ、いよいよ七月、大林組撮影部隊が長岡入りしました。

ところが、七月末の「平成二十三年新

潟・福島豪雨」でさらなる危機が訪れます。花火会場は水没し、開催の危機に陥りました。しかし、長岡市は花火会場をわずか二日間で復旧整備し、開催決定を発表しました。結局、長岡での撮影は、予定通り行われ、広島、長崎、天草ですべての撮影が終了しました。さらに十二月八日、長岡では、日米開戦の日に、初めて慰霊の花火が打上げられました。真珠湾と長岡空襲の殉難者の鎮魂と世界平和を願い、白菊三発が打上げられ、それは映画の中に収められました。

七 映画製作へ向かうエネルギー

映画づくりは簡単なことではありません。怖さ知らずの我々映画の素人軍団は、想いと勢いだけでぶつかりました。それができたのは、常に新潟・長岡市民の応援と長岡市やスポンサーの支えがあったからです。まさに、天の時と地の利と人の和が結集した結果です。

八 上映後の反響

新作映画の出口調査「ぴあ初日満足度ランキング」では堂々の第一位。首都圏で若者を中心に大きな反響を呼んでいます。有名人のツイッターでも「この映画すごい！」と評判になっているそうです。

この映画を観ると「自分は何ができるだろうか？」と考えずにはいられなくなります。ただし、結論が提示されていないので、すっきりしません。また、その時の心のあり様で、映画の受け止め方も違ってきますから、何回観ても飽きません。「この空の花」を観た人は、じっとしていられなくなつて、いろいろな風を起こしてくれるのでは、と期待しています。

(文責 小林 裕之)